

(前ページから続く)

第1グループ・大塚座長

小学校からの支援要請で特別支援が一番多いので特別支援を中心に話合った。

支援者は「より良い支援のためにどうしたらよいか?」いろいろ問題意識を持っています。また「こうすればよいのではないか」という提案も持っている。しかしこのような問題提起や提案をだれに相談すればよいか分からない。学校幹部のせんせいがたも忙しくてなかなか現場をのぞくゆとりがない。本来特別養護施設に行くべきところの児童が無理に普通の小学校通学していて現状ではボランティア(支援者)に任せっぱなしになっている。

学校側の特別支援要請と支援者のマーケティング問題で学校・支援者双方が問題解決に具体的に動けない点が最大の課題となっている。

第2グループ・神林座長

現場ではボランティア(支援者)が孤立しているとまでは言わないが、共通の意識をもてる場所が少ない。そこで今日のようなディスカッションの場があるということは嬉しいと意見が多かった。

今日は1時間ですが、2時間とまとめて30分あればどうでしょう。

同じ学校に二人が支援に入っているもほとんど話し合わない、また、担任の先生と少し話し合うだけで、学年の先生や校長先生との話し合いの場が皆無のところが多い。たとえば、給食でも、ある学校では「教育の一環だから食べてください」という学校もあれば、給食費240円を支払ってくださいという学校もある。

やはり、学校と話し合う推進委員のような仕組みをつくって、最低の基準でも学校と話し合えることが大切ではないでしょうか。また、ボランティア(支援者)は社会的にも経験豊富ですから、先生方と話し合って先生方の考えを理解して補助に当たりたいと考えています。



第3グループ・川上座長

第3グループは、仲良し学級と特別教育支援に係わっている方が大半でした。そのなかで、特に、仲良し学級をサポートする場合と普通学級にいるハンディギャップのある児童をサポートする場合との大きなちがいについて話し合いました。

仲良し学級の子どもさんは担任の先生に密接にサポートされており、支援者も非常に子どもたちと仲良くできる、また、たとえば算数ができなかった子どもが指導によって少しずつ伸びている。普通学級にいる子どもは取り残されているようにみえて、支援者もどうしたらよいか悩むことがある。また学習支援活動のやりがいということを見ると、校長、教頭と挨拶もせず話もしないという学校があり改善したい。

子どもと係わると自分が慕われていると感じる、これが生きがいになっている。

第4グループ・渡邊座長

どのグループも同じかと思うが、皆さんは学習支援活動以外にもさまざまなボランティアをされています。そこで、特別支援活動について考えると、なかなか取り組みが少ないというのは、自然体で取り組むということが大切ではないかと話し合いました。

障害のある子どもや、健常の子どもと接する中で、我々もそこから多くのものであることができると思います。

また、参加者の方からの発言で、地域のグループに持ち帰って、今日この話をして学習支援、特別支援に希望者ができるよう話してみたいという意見もありました。

グループディスカッションのまとめの発表後、松本教務リーダーから「皆様にお会いするのが、私の元気の素でしてこのシルバーカレッジに勤めてから、学生の皆様、卒業生の皆様の生きていかれるお姿、そしてボランティア活動はじめさまざまな活動に一生懸命取り組まれているお姿に、本当に感激していますし、素晴らしいなと思っています。

そういう皆様にお会いできる子供たちが一人でも多く増えればいいなあ、皆様とお会いした子供たちはきっとその後の人生、心の何処かに温かいものを宿して、いい人生が送れるのではないかと心から思っています。

学校にはさまざまな先生がいるし、色々な組織のあり方があって、ご指摘は全てごもっともだということは、私自身感じますけれど、そんな中でも子供たちはやはり頑張っていて生きていますし、皆さんと出会うことで子供たちは絶対に心の中に温かいものを持って将来、何か辛いことあったときにきっと支えになると思います。

どんな形でも結構ですので、一人でも多くこのシルバーカレッジの学生・卒業生の皆様が子供たちと係わってくれることが増えますことを願って、そして私はそれをつなぐ仕事が出来たらと思っておりますので、今後ともどうぞ宜しくお願いします。」と講評を頂いた。

最後に総括として中沢委員長が「本日はお暑い中をありがとうございました。

グループディスカッションの座長4名の方のお話を聞きながら、今日お集まりの皆様が本当に熱心にお話し合いをされ、前向きな指針になるまとめが伺えて、私も大変嬉しく存じます。

先ほどのお話の内容を委員会でもよく検討させていただき、次回の参考にいたしたい。例えば、時間はもっと長く取れるように午後の開催にするとか、特別支援活動に対し改めてしっかりとした考え方をもって臨まなければならないと思いました。今日のように

(次ページに続く)